令和４年度日本語指導支援推進校事業

実 践 報 告 集

兵庫県教育委員会

目　次

※ 各項目をクリックすると、該当ページに移ります。

はじめに

1　本資料について

(1)　日本語指導支援推進校事業について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

(2)　本資料の活用について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2　日本語指導について

(1)　日本語指導とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

(2)　外国人児童生徒のためのＪＳＬ対話型アセスメントＤＬＡ　・・・・・・・・2

(3)　特別の教育課程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

(4)　個別の指導計画（年間指導計画）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

(5)　ＪＳＬカリキュラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

3　各校の実践報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

4　ＪＳＬ参照枠（全体）とＤＬＡ（４技能）の評価例・・・・・・・・・・・・・28

はじめに

グローバル化の進展等に伴い、兵庫県には現在、119,509 人（令和 4 年６月末現在）の外国人の方々が暮らしています。公立学校に在籍する外国人児童生徒数は 3,748 人、そのうち、日本語指導が必要な外国人児童生徒は 1,337 人（令和４年５月１日現在）であり、年々増加傾向であるとともに、散在化傾向が進んでいます。

日本語指導が必要な外国人児童生徒にかかわる課題として、自尊感情やアイデンティティが育まれにくいという問題や、基礎学力が十分定着しておらず、進路に影響する問題などが生じています。

兵庫県教育委員会では、平成 12 年に「外国人児童生徒にかかわる教育指針」を策定し、外国人児童生徒の自己実現を支援するとともに、すべての児童生徒に国籍や民族等の「違い」を「違い」と認め合い、豊かに共生しようとする意欲や態度を育むなど、人権尊重を基盤に多文化共生社会の実現をめざす教育を推進しています。

平成 28 年度から、県立神戸甲北高等学校、県立芦屋高等学校、県立香寺高等学校の３校において、外国人生徒の特別枠選抜を設けるとともに、小学校・中学校段階で、日本語（生活言語･学習言語）の習得と基礎学力の定着を図るため､「日本語指導支援推進校事業」を実施し、３市（姫路市、芦屋市、三木市）16 校に日本語指導支援員を派遣しています。2019（平成 31）年度からは、県立伊丹北高等学校、県立加古川南高等学校の２校が外国人生徒の特別枠選抜校に加わり、本事業の重要性はますます高まっているといえます。今後も、指導を受けた児童生徒が各教科及びその他の教育活動に日本語で参加し、主体的に学べるように、日本語指導支援員の指導力向上と校内連携の強化をめざし、研修等において指導内容や指導方法の工夫・改善、体制の整備を図りながら、さらに事業を充実させていきたいと考えています。

本資料は、令和４年度の日本語指導支援推進校の実践を抜粋してまとめたものです。各学校における日本語指導の充実に大いに活用されることを期待しています。

令和５年３月

兵庫県教育委員会

１　本資料について

(1)　日本語指導支援推進校事業について

兵庫県教育委員会は、日本語指導が必要な外国人児童生徒等に対し、実態に応じた日本語指導を推進し、日本語（生活言語、学習言語）の習得と基礎学力の定着を図るため、日本語指導支援員を派遣する市町に対して、経費の一部を補助する事業を実施しています。

令和４年度の推進校（姫路市・芦屋市・三木市）の実践を抜粋し、本資料にまとめました。

(2)　本資料の活用について

日本語指導を行うためには、日本語指導が必要な児童生徒の日本語習得状況を把握し、個別の指導計画等を作成し、系統的・継続的な支援を行うことが大切です。

そこで、各推進校は、「外国人児童生徒のためのＪＳＬ対話型アセスメントＤＬＡ」（平成 26 年文部科学省作成）等を用いて日本語能力測定を実施し、その結果を踏まえて日本語指導や教科指導を行っています。

※　ＤＬＡについての詳細は、次ページ２(2)「外国人児童生徒のためのＪＳＬ対話型アセスメントＤＬＡ」を参照。

２　日本語指導について

(1)　日本語指導とは

児童生徒が日本語を用いて学校生活を営むとともに、学習に取り組むことができるようにすることを目的としています。

ア　「日本語を用いて学校生活を営む」ことができる

日本の学校生活や社会生活について必要な知識を学び、日本語を使って行動する力を身につけることが主な目的となります。健康・安全・関係づくりなどの観点や、教科や文房具、教室の備品名など、学校生活で日常的に使う言葉（※「サバイバル日本語」と呼ばれることがあります）などについて、その児童生徒にとって緊急性の高いものから順に指導を行うことを目的とするものです。

具体的には、挨拶の言葉や実際の場面で使用する日本語の表現を練習したり、自分の名前を平仮名や片仮名で書いたり、教室に掲示されている文字を理解できるようにしたりすることなどが考えられます。

イ　「日本語を用いて学習に取り組む」ことができる

日本語で行われる在籍学級での授業に参加し、周囲の支援や様々な関わりを通して支障なく学習に取り組むことができることが主な目的となります。

基礎的な力としての発音、文字・表記、語彙、文型に関する指導や、例えば「書く」ことに焦点を絞って段階的な指導を行うなど、児童生徒の日本語の習得状況や、学習の進捗状況に合わせて指導計画をたてることが必要です。

(2)　外国人児童生徒のためのＪＳＬ対話型アセスメントＤＬＡ

日常会話はできるが、教科学習に困難を感じている児童生徒を対象とし、言語能力を把握すると同時に、教科学習支援のあり方を検討するための資料として開発されました。

いわゆる従来型の紙筆テスト等とは異なり、テストから得られる結果を序列化するためのものではなく、テストの実施過程そのものを、学びの機会として捉えるところに特徴があります。そのため、テストの実施を指導者が児童生徒に向き合う大切な機会（対話重視）であるとし、「対話型」を基本としています。指導者と子どもが一対一で向き合うことで、日頃の学習の成果や今後の支援活動で必要となる学習内容・学習領域を絞り込んでいく上で、必要な情報を得ることができます。

<table>
<tr><th>ＤＬＡ
ステージ</th><th>日本語の学習段階</th><th>支援の段階</th><th></th></tr>
<tr><td>6</td><td rowspan="2">・教科内容に関連した内容が理解できる。
・授業に興味を持って参加しようとする。
・読み書きに抵抗感が少ない。
・自律的に学習しようとする態度が見られる。</td><td rowspan="2">【支援付き
自律学習】

必要に応じて支援</td><td rowspan="6">「特別の教育課程」の活用を推奨</td></tr>
<tr><td>5</td></tr>
<tr><td>4</td><td>・日常生活に必要な基本的な日本語がわかり、自ら発話ができる。
・話し言葉を通したクラス活動にある程度参加できる。
・授業を理解して学習するには読み書きにおいて困難が見られる。</td><td rowspan="2">【個別学習支援】

個別的な指導が必要</td></tr>
<tr><td>3</td><td>・単文の理解がむずかしい。
・発話に誤用が多く見られる。
・クラス活動に部分的参加を始める。</td></tr>
<tr><td>2</td><td rowspan="2">・日本語による意思疎通がむずかしい。
・在籍学級での学習がほぼ不可能である。</td><td rowspan="2">【初期支援】

手厚い指導が必要</td></tr>
<tr><td>1</td></tr>
</table>

(3)　特別の教育課程

帰国・外国人児童生徒等に対する日本語指導を一層充実させるため、「学校教育法施行規則の一部を改正する省令」により、当該児童生徒の在籍学級以外の教室で行われる指導について「特別の教育課程」を編成・実施することができるようになりました。

「特別の教育課程」による日本語指導は、児童生徒が日本語を用いて学校生活を営むとともに、学習に取り組むことができるようにすることを目的とし、在籍学級の教育課程の一部の時間に替えて、在籍学級以外の教室で行います。

(4)　個別の指導計画（年間指導計画）

児童生徒一人ひとりの実態に応じて「特別の教育課程」を編成し、きめ細かな日本語指導を行うためには、個々の児童生徒の日本語能力や学校生活への適応状況も含めた生活・学習の状況、学習への姿勢・態度等の的確な把握に基づき、指導の目標及び指導内容を明確にし、指導計画を作成することが必要です。

個別の指導計画では、個の日本語習得状況に応じて「技能別（聞く・話す・読む・書く等）」及び「各教科」の日本語指導の目標を学習段階や単元ごとに設定して、指導の充実に活かしていきます。文部科学省のホームページには、様式が掲載されております。

(5)　ＪＳＬカリキュラム

ＪＳＬ（Japanese as a Second Language）カリキュラムは、日本語の力が不十分なため、日常の学習活動についていけない外国籍の（日本語を第二言語とする）生徒の授業に参加するための日本語の力と学ぶ力（「日本語で学ぶ力」）を育成することを目的としたモデル・カリキュラムです。

平成 15 年度に小学校編、平成 18 年度に中学校編が文部科学省から刊行されています。

◇　参考

1　海外子女教育、帰国・外国人児童生徒教育等に関するホームページ「CLARINET へようこそ」（文部科学省）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet

2　子ども多文化共生センターホームページ（兵庫県教育委員会）
http://www.hyogo-c.ed.jp/~mc-center/

３　各校の実践報告

◇ 各枠内をクリックすると、該当ページに移ります。
◇ 各枠内の表記内容は、右図の通りです。
◇ ＤＬＡについての詳細は、２(2)「外国人児童生徒のためのＪＳＬ対話型アセスメントＤＬＡ」を参照。

校　種 教科等 該当ページ

※注：ＤＬＡは、日本語での測定と同じ内容・方法で、母語で測定することもできます。

ＤＬＡ＜話す＞の評価結果による分類

ＤＬＡ＜話す＞ステージ		母　語　力　※注					
		1	2	3	4	5	6
日本語能力	6						
	5						中学校 日本語 P.24
	4						
	3			中学校 日本語 P.22			
	2			小学校 国語 P.20			
	1		小学校 日本語 P.5	小学校 日本語 P.7 小学校 日本語 P.9	小学校 日本語 P.12 中学校 数学 P.15	小学校 日本語 P.17	

【その他】思考力を養う日本語指導：小学校・国語・P.26
（ＤＬＡ日本語能力ステージ４）

日本語指導支援推進校事業　実践報告書【小学校・日本語】P.4へ戻る

1　児童生徒の日本語習得状況（令和4年5月20日）

(1)　DLAステージ

ステージ1

(2)　DLA＜話す＞のステージ（令和5年1月10日）

日本語能力	ステージ1
母語力	ステージ2

2　児童・生徒の実態

(1)　学　　年：　小学校・第2学年
(2)　国籍・母語：　フィリピン・ビサイヤ語・英語
(3)　在留期間：　80ヶ月
(4)　日本語習得状況及び学習状況
・ひらがなは読めるが言葉のまとまりとして読むことは難しい。
・漢字やカタカナはだいたい読める。
・10までの数の概念が不十分である。具体物を使うと少しずつ理解できる。
・文章題は時間がかかるが、説明を加えると立式できる。

3　教科：単元名　（日本語指導：教材名）
日本語指導：おもちゃの作り方をせつめいしよう

4　本単元（本教材）の学習から伝えたい学力及び日本語学習能力
・説明文から大切な記述を見つけ、メモにまとめることができる。
・メモを元にして、おもちゃ作りの手順書を書くことができる。

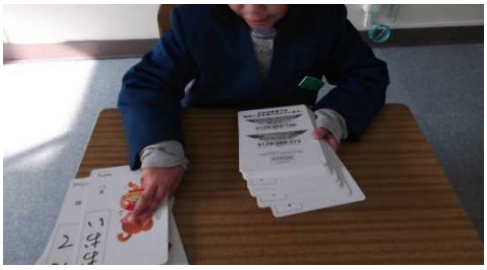
5　指導内容の概要（※詳細は【別紙】参照）
・挿絵と文を対応させながら、教師の範読を聞く。
・段落ごとに、順序を表す言葉や写真、図を手掛かりに、作り方の作業手順を理解する。
・「馬のおもちゃ」を作る。
・おもちゃ作りの手順書を書き、完成した手順書を読みあう。

6　指導における工夫点・学習の成果
・馬のおもちゃ作りを通して、作品の良さを互いに認め合う場を設定することで、達成感が味わえることができた。
・順序を表す言葉を使って手順を書くことにより、理解が深まった。
・友だちの作品を観賞したり、手順書を読みあったりする相互評価を取り入れることで、在籍学級での友だちに認められ自信を持つことができた。

7　教材・教具（開発教材も含む）
・小学校国語（光村図書）2年下
「馬のおもちゃの作り方」「おもちゃの作り方をせつめいしよう」
・五味太郎の「漢字の絵本ⅠⅡ」

8　活動の様子（板書や児童生徒の写真等）

・おもちゃ作りの説明でよく出てくる言葉のカードを使って、ことばの意味を理解している。



【別紙】指導の流れ

1 あいさつをする。 ・学習の流れを確認する。	・今日のめあてや学習する内容を黒板に貼ることで見通しを持たせ、意欲的に課題に取り組めるように学ばせる。
2 教材文を読む。 ① あとに続いて ② 句点で交代 ③ はんたい言葉で ④ 挿絵と合わせながら	・楽しみながら読めるように、立って読んだり、座って読んだりしながら様々な読みをし、学習に興味をもたせる。 ・意味の難しい言葉は確認しながら、なるべく生活の中の動きやよく使う場面を想定して、意味の確認をする。
3 にている、はんたいの言葉を確認する。 ・教材文や挿絵から、言葉を見つけ、その言葉のにている言葉・はんたいの言葉をカードに書く。	【ルール】 ・にている・はんたいの意味を理解するため、まずは、挿絵から言葉を探す。 ・はんたいの意味が理解しやすいが、にている言葉はなかなか意味が難しいと思う。意味理解だけにこだわることなく、楽しく語彙が広められるようにする。
4 言葉カードをつかってゲームをする。	・3の活動で書いたカードを使用して、カードゲームをする。 ①カードをめくる「出た言葉を発音する」 ＊にている・はんたい　を伝える ②もう1枚カードを引く 「出た言葉を発音する」 ＊にている・はんたい　を答える。 ※教師と交代で行う。
5 本時のふりかえりをする。	・本時のふりかえりをし、あいさつをする。 ・本時で印象に残った言葉を選び、理由も話す。

　P.4へ戻る

1　児童生徒の日本語習得状況

(1)　ＤＬＡステージ（令和４年６月１日）

ステージ１

(2)　ＤＬＡ＜話す＞のステージ（令和４年６月１日）

日本語能力	ステージ１
母語力	ステージ３

2　児童・生徒の実態

(1)　学　　年：　小学校・第１学年
(2)　国籍・母語：　ベトナム・ベトナム語
(3)　在 留 期 間：　６か月
(4)　日本語習得状況及び学習状況
・ひらがなの読み書きが少しできる。
・音読は一字一字ひろい読みをする。
・使用頻度の高い言葉の意味はある程度分かるが、知らない日本語が多い。

3　教科：単元名　（日本語指導：教材名）
日本語指導：おみせやさんごっこをしよう

4　本単元（本教材）の学習から伝えたい学力及び日本語学習能力
・絵カードを見て、新しい言葉を覚えることができる。
・まとめてつけた名前(果物、魚、動物、乗り物、花、鳥)があることを理解する。

5　指導内容の概要
・おみせやさんごっこをするという見通しを持たせる。
・まとめてつけた名前を確認する。
・覚えた言葉を使って、「〇〇をください。」と言って、店員とやりとりすることができる。

6　指導における工夫点･学習の成果
・絵カードを使ってなかまわけをさせることで、まとめてつけた名前を視覚的に捉えることができた。
・店員役やお客さん役をくりかえし体験することで、新しく覚えた言葉をたくさん使って楽しく活動できた。

7　教材・教具（開発教材も含む）
・国語の教科書（光村図書（下））、ノート
・絵カード（くもん）、自作の絵カード

８　活動の様子（板書や児童生徒の写真等）

　P.4へ戻る

1　児童生徒の日本語習得状況

(1)　ＤＬＡステージ（令和４年７月 11 日）

日本語能力	ステージ１

(2)　ＤＬＡ＜話す＞のステージ（令和５年２月３日）

日本語能力	ステージ１
母語力	ステージ３

2　児童・生徒の実態

(1)　学　　年：　小学校・第１学年
(2)　国籍・母語：　ベトナム・ベトナム語
(3)　在 留 期 間：　０ヶ月
(4)　日本語習得状況及び学習状況
ベトナムで生まれ、2022年６月27日入国。日本語は全く理解できない。

3　教科：単元名　（日本語指導：教材名）
日本語指導：みぎ・ひだり・うえ・した・まんなか

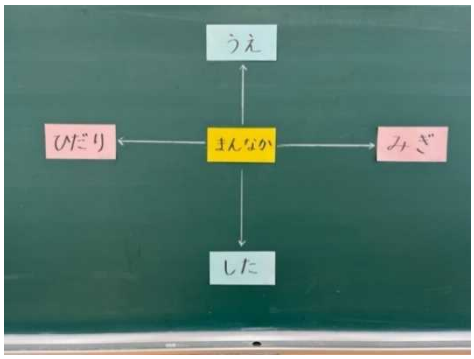
4　本単元（本教材）の学習から伝えたい学力及び日本語学習能力
・「右」、「左」、「まんなか」という言葉を知り、それを使って物のある場所を言うことができる。
・「上」、「下」、「まんなか」という言葉を知り、それを使って物のある場所を言うことができる。

5　指導内容の概要（※詳細は【別紙】参照）
・紙コップをふせて並べ、「右」「左」を知る。紙コップの中に消しゴムを入れて紙コップをシャッフルし、消しゴムのある場所を「みぎ」「ひだり」を使って答える。言えるようになったら、紙コップを一つ増やし、「まんなか」を知る。再びシャッフルし、消しゴムのある場所を「右」「左」「まんなか」を使って答える。
・トランプを２枚重ねて置き、「上」「下」を知る。１枚は児童の好きなカードとし、そのカードを選ぶには「上」「下」どちらかを答える。シャッフルして何度も言う。

6　指導における工夫点･学習の成果
・遊びを取り入れて、楽しみながら答えることで、何度でも飽きずに「上」「下」「真ん中」や、「右」「左」「真ん中」を言うことができた。教師と役割を交替することで、「右？」「左？」「真ん中？」と問うことも覚え、積極的にその言葉を使うことができ、覚えることができた。

7　教材・教具（開発教材も含む）
・「日本語学級 1 」
・紙コップ
・トランプ

８　活動の様子（板書や児童生徒の写真等）



はじめは、「右」「左」の２つの言葉を知らせ、様子を見ながら語彙を増やしていった。聞いただけでは覚えられないので、黒板に「みぎ」「ひだり」の短冊を貼り、いつでも見られるようにしたので、児童は安心して活動することができた。また、日本語だけでなくベトナム語も伝えることで、意味を正しく認識することができた。

児童は、教師からの問いに答えるだけでなく、自分から問題を出したいと言って、積極的に出題していた。

「みぎ」「ひだり」「まんなか」が言えるようになったら、次にトランプを使って、「うえ」「した」「まんなか」も知らせ、カードを選択させた。

単に言葉を覚えるだけの学習なら定着しにくいが、遊びを通して何度も何度も繰り返してその言葉を使うことで、１時間の学習が終わるころには、ほぼ覚えて使うことができた。

楽しかったからか、次の日も「せんせい、『みぎ』『ひだり』『まんなか』する？」と尋ねてきた。学習に遊びを取り入れることの大切さを感じた。

【別紙】学習指導案（展開）

学習活動	指導上の留意点	備考
1．「右」「左」を知る。	・意味が理解しにくい場合には、日本語だけでなく、ベトナム語でも知らせる。	・「みぎ」「ひだり」の短冊
2．どの紙コップに消しゴムが入っているかを考えて言う。	・はじめは、教師が紙コップの位置をシャッフルし、児童に「右？」「左？」と問うことで、言葉に慣れさせる。 ・慣れてきたら、児童に「右？」「左？」と問わせることで、言葉を使う回数を増やすようにする。	・紙コップ２個 ・消しゴム１個
3．「真ん中」を知り、３つのコップをシャッフルして、消しゴムが入っているコップを当てる。	・２の活動と同様に、教師が問う場面と、児童が問う場面を設定し、何度も言葉を使うようにする。	・「まんなか」の短冊 ・紙コップ３個
4．「上」「下」「真ん中」を知る。	・日本語と対応するベトナム語も必要に応じて知らせる。	・「うえ」「した」の短冊
5．トランプ３枚のうち、好きな数字を１枚選ぶ。そのトランプがどこにあるかを考えて言う。	・はじめは、教師が「上？」「下？」「真ん中？」と問い、児童が選ぶ。慣れてきたら、児童が問う。これを、何度も繰り返す。	・トランプ３枚
6．今日のまとめをする。	・今日覚えた語彙「右」「左」「上」「下」「真ん中」を復習し、定着させる。	

　P.4へ戻る

1　児童生徒の日本語習得状況

(1)　ＤＬＡステージ（令和４年９月12日）

ステージ１

(2)　ＤＬＡ＜話す＞のステージ（令和５年１月18日）

日本語能力	ステージ１
母語力	ステージ４

2　児童・生徒の実態

(1)　学　　年：　小学校・第２学年
(2)　国籍・母語：　フィリピン・タガログ語
(3)　在 留 期 間：　３ヶ月
(4)　日本語習得状況及び学習状況

日本語を話したり、聞いて理解したりすることは難しく、第２言語である英語を使って学習をしている。教師や多文化共生サポーターの支援、英語を話すことができる児童の助けを借りることで学校生活を送っている。学習においては、個別の課題を設定し、サバイバル日本語、ひらがなやカタカナの習得から少しずつ進めている。

3　教科：単元名　（日本語指導：教材名）

日本語指導：言葉集めをしよう・教室の中にある物の名前を知ろう

4　本単元（本教材）の学習から伝えたい学力及び日本語学習能力

教室にあるものの名前を知り、「貸してください」「ありがとう」を使うことができる。

5　指導内容の概要（※詳細は【別紙】参照）

・教室にあるものを集める。
・ものの名前を知る。
・ものの名前を発音する。
・ものの名前を書く。
・「～貸してください」「ありがとう」の言い方を知り、使ってみる。

6　指導における工夫点･学習の成果

実物を使って物の名前に沢山触れ、何度も繰り返して発音させることで覚えることができるようにした。発音できるようになった言葉を文字に書く学習を取り入れることで、より記憶が定着した。

「～を貸してください」→「どうぞ」→「ありがとう」のやりとりの流れがスムーズにできるようになり、実際に必要な場面で使うことができていた。

7　教材・教具（開発教材も含む）

・公文出版　　ひらがなカード、カタカナカード、生活道具カード、反対言葉カード、ぶんカード
・日本語ワーク　お助け教材
・くろしお出版　おひさま

８　活動の様子（板書や児童生徒の写真等）

（写真１）「貸してください。ありがとう。」の練習をしている様子。

（写真２）覚えた名前を文字で表す学習をしている様子。

（写真３）カードを使って学習をしている様子。

（写真４）ワークシートを使って復習をしている様子。

写真１

写真２

写真３

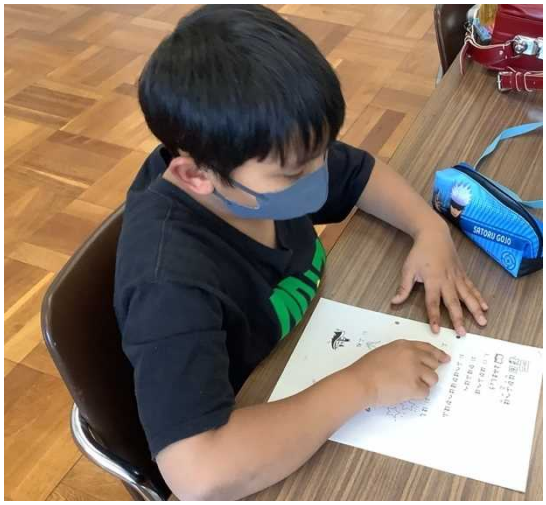


写真４

【別紙】指導の流れ

目標：教室にある物の名前を知ろう
展開：

学習活動	指導上の留意点	評価基準【　】 評価方法（　）
1 本時の学習のめあての確認をする。		
2 教室にあるものを集める。	・教室にあるもの中で、名前を知らないものを 10 個集めさせる。身近なものから学習できるように促す。	・教室にあるものの名前に興味を持って学習に取り組もうとしている。【態】（発言）
3 ものの名前と用途を知る。	・ものの名前を母語で確認し、日本語の言い方と用途を確認する。 ・用途を知らない言葉は丁寧に確認し、何度も発音して定着を図る。	・言葉の意味や用途を知ろうとしている。【知】（発言）
4 ものの名前を書く。	・カタカナは未習得のものが多いので一覧表を準備しておく。 ・ひらがなで書く言葉とカタカナで書く言葉があることを伝える。	・教室にあるものの名前を知り、ひらがなやカタカナを使って書くことができる。【知】（ワークシート）
5 「～を貸してください」を練習する。 「～と～を貸してください」を練習する。	・十分理解できていたら，「～と～を貸してください」を練習する。 ・実際に生活の中で使うことができるように、実物を使ってやり取りを経験させる。 「～を貸してください」 →「ありがとう」 ・貸す側、借りる側の両方を経験させる。 「筆箱を貸してください」「ありがとう」 「定規を貸してください」「ありがとう」	・貸し借りの際のやり取りの仕方を知ろうとしている。【態】（発言）
6 本時の学習の振り返りをする。		

日本語指導支援推進校事業　実践報告書【中学校・数学】　P.4へ戻る

1　児童生徒の日本語習得状況

(1)　ＤＬＡステージ（令和４年５月 11 日）

ステージ１

(2)　ＤＬＡ＜話す＞のステージ（令和４年８月 18 日）

日本語能力	ステージ１
母語力	ステージ４

2　児童・生徒の実態

(1)　学　　年：　中学校・第２学年
(2)　国籍・母語：　イラン・ペルシャ語
(3)　在 留 期 間：　16 ヶ月
(4)　日本語習得状況及び学習状況

・来日約一年が経ち、本校転入後、週１回放課後日本語教室へ通級、午前中３時間の通訳サポートの入り込み､放課後週４時間の学習室指導を行う。日本語習得は、単語をつないで文で話そうとする段階である。自分自身のことや身近な話題についてはかなり流暢に話せるようになったが、語彙が不足し、助詞の使い方に誤りが多い。
・問題文の内容が理解できず、テスト時は別室での取り出し支援が必要である。
・数学(算数)について、家庭事情で母国での小学校５、６年が就学不足のため、授業をオンラインで受けるが、そのための基礎的な計算力不足が喫緊の課題である。

3　教科：単元名（日本語指導：教材名）
数学：掛け算九九、余りの出る割り算

4　本単元（本教材）の学習から伝えたい学力及び日本語学習能力
・中学の数学履修のために、四則計算（優先順序等）を確かなものにする。

5　指導内容の概要（※詳細は【別紙】参照）
・百マス計算で九九の掛け算の定着度を確かめ、割り算や分数計算にも基礎であることを認識させる。
・また、「移項」「積・商」など数学用語について定着を図る。

6　指導における工夫点･学習の成果
・計算力とともに教科用語の習得を図る。

7　教材・教具（開発教材も含む）
・自作計算問題プリント（百マス計算・余りの出る割り算問題）

8　活動の様子（板書や児童生徒の写真等）
・計算力不足は本人も自覚し、自分の進路に関わることなので、意欲的に取り組めた。

【別紙】指導の流れ

学 習 活 動	指導の留意点等
① 百マス計算表の2～9の段を順に唱える。	・余りの出る割り算を試したところ、九九が不完全なため最大約数がなかなか出てこない。余りを出すための繰り下げ計算が暗算できず、手間取る。
② 順不同での百マス計算をする。	・転入後、1年半ほどになるが「九九」が未だに定着せず、放課後の学習会の最初の15分ほどは毎回百マス計算をすることとした。
③ 割り切れる割り算問題を10題ほどする。 （例）28÷4＝7 ※次の式の（ ）を考える。 （例）28＝7（×4）	※九九ができないと割り算ができないことを確認する。 ※「4で割る」とは「4等分割すること」を、図などを用いて押さえておく。 （分数の分母数になることも含む。） ※移項すると記号が変わることを確認する。
④ 余りの出る割り算問題を10題ほどする。	
⑤ 次の4題をする。 29÷4＝7（余り1） 30÷4＝7（余り2） 31÷4＝7（余り3） 32÷4＝8 ※割り切れるので （余りなし0）	※「余り」＝〔割切れず残った数〕は割る数より小さいことを確認する。 （四則計算の答えは和（わ）・差（さ）・積（せき）・商（しょう）と言い、割り算の答えは「商」であることも教える。）
⑥ 次の式の（ ）を考える。 31÷4＝7 余り(3) 31＝7(×4)（＋3） 31－（28）＝（3） 28＝（31 － 3） 両辺が＝の場合の移項の仕方を考える。	※余りを出すための手順を確認しながら割り算も「九九」ができないと不完全だということを認識させる。 (繰り下げ計算では練習の絶対量が少ないので、暗算ができず指を使うこともある。) ※「移す」「写す」の意味の違いを教える。

※進学を希望しており、数学では小学校段階の計算スキルアップが喫緊の課題である。

　P.4へ戻る

1　児童生徒の日本語習得状況

(1)　ＤＬＡステージ（令和４年９月12日）

ステージ１

(2)　ＤＬＡ＜話す＞のステージ（令和５年１月18日）

日本語能力	ステージ１
母語力	ステージ５

2　児童・生徒の実態

(1)　学　　年：　小学校・第１学年
(2)　国籍・母語：　フィリピン・タガログ語
(3)　在 留 期 間：　３ヶ月
(4)　日本語習得状況及び学習状況

簡単な生活言語については、よく使う単語や挨拶程度は理解できるようになってきている。しかし細かい説明や、初めてのことは全く理解できていない。学習言語は、ひらがなはほとんど理解しているが、カタカナや漢字は未習得のものが多い。教科書の文章程度は、単語をまとまりとして捉え（漢字はルビあり）、音読できるようになってきた。

3　教科：単元名　（日本語指導：教材名）
日本語指導：ひらがな言葉あつめ・動きの言葉を見つけよう

4　本単元（本教材）の学習から伝えたい学力及び日本語学習能力
・多くの言葉に触れ、言葉の習得に繋げる。

5　指導内容の概要（※詳細は【別紙】参照）
・既習の動詞を確認する。
・新しく学習する動詞を知る。
・新しく学習する動詞を動作化する。
・新しい動詞を文字で書く。
・「命令ゲーム」をする。

6　指導における工夫点･学習の成果

日本語が全くわからない状態で編入してきたため、サバイバル日本語の習得から始めた。ひらがなの読み書きを習得するため、言葉集めゲームや絵本の読み聞かせ、毎日のひらがな習熟度の確認などを行った。

日本語で授業に参加することは難しいが、板書の文字を読んだり、友だちの書いた文字を読んだりすることができるようになった。また、簡単な絵本も自分で読むことができるようになり、意欲的に日本語の学習に取り組むことができている。

7　教材・教具（開発教材も含む）
公文出版社　ひらがなカード、カタカナカード、反対言葉カード
ちびむすドリル　言葉の練習プリント
にほんごワーク（外国人児童生徒向け無料学習プリント）

8　活動の様子（板書や児童生徒の写真等）

（写真１）ひらがなカードで言葉を覚えている様子。

（写真２）ひらがな表で文字を確認している様子。

（写真３）ワークシートで動詞の復習をしている様子。

（写真４）教室でよく使う言葉や文の確認をするためのカード。

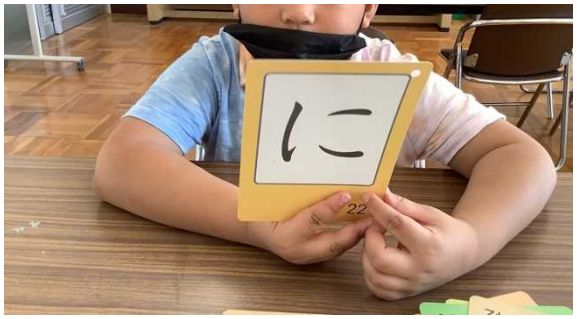


写真１

写真２

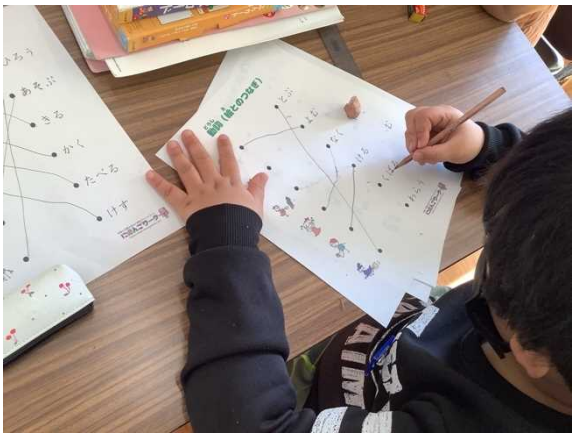


写真３

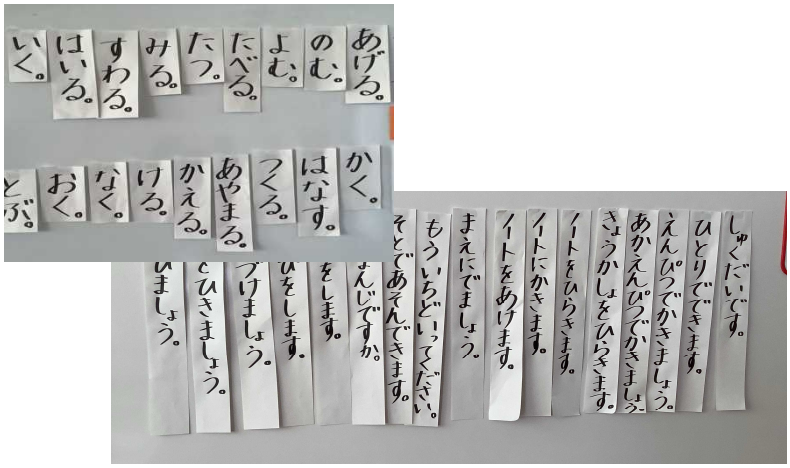


写真４

【別紙】指導の流れ

目標：動きを表す言葉を知ろう
展開

学習活動	指導上の留意点	評価基準【　】 評価方法（　）
1 本時の学習のめあての確認をする。		
2 絵カードを使って、動きを表す言葉を知る。	・日常生活で使用頻度の高い言葉から学習できるようにカードを選んでおく。 ・児童が分かったつもりになっていないか確認するために、母語で意味を説明させる。	・動きを表す言葉に興味を持って学習に取り組もうとしている。【態】（発言）
3 言葉を動作化する。	・初めて聞く言葉については写真や動画を見せて、様子を明確にさせる。伝わりにくい時は、母語を聞かせる。	・言葉の意味を考えようとしている。【知】（発言）
4 動詞の使い方を知る。	・言葉を動作化することにより、その様子を想像できるようにする。 ・主語を加え、文として使えるようにする。 ○ぼくが立つ。 ○先生が立つ。 ○給食を食べる。 ○寿司を食べる。	・動きを表す言葉を知り、その使い方について理解しようとしている。【態】（発言）
5 お願いゲームをする。	・動詞のカードを見ながら「～してください。」を教師と交互に言い合い、文字を読んで理解できているか、聞いて理解できているかを確認する。理解できていない言葉は再度動作化させるなどして、定着できるよう促す。 ○立ってください。 ○歩いてください。	・動きを表す言葉の意味を理解し、使おうとしている。【知】（発言）
6 本時の学習の振り返りをする。	・本時で新しく学習した動詞を確認する。	

日本語指導支援推進校事業　実践報告書【小学校・国語】 P.4へ戻る

1　児童生徒の日本語習得状況

(1)　ＤＬＡステージ（令和４年５月 20 日）

ステージ２

(2)　ＤＬＡ＜話す＞のステージ（令和５年１月 10 日）

日本語能力	ステージ２
母語力	ステージ３

2　児童・生徒の実態

(1)　学　　年：　小学校・第３学年
(2)　国籍・母語：　フィリピン・ビサイヤ語・英語
(3)　在留期間：　80ヶ月
(4)　日本語習得状況及び学習状況
・簡単な生活言語は使えるが、会話は成立しにくい。
・ひらがなの文章は読めるが、既習の漢字が入ると読めない時がある。
・たし算、引き算、かけ算等の計算はできる。
・わからないことがあると、あきらめることが多いが、一対一でゆっくり対応すると、根気強く取り組めることもある。

3　教科：単元名　（日本語指導：教材名）
国語：ありの行列

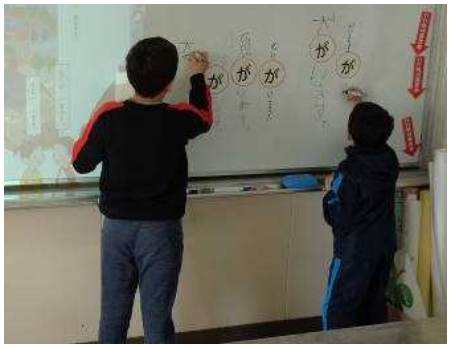
4　本単元（本教材）の学習から伝えたい学力及び日本語学習能力
・単語のまとまりで音読することができる。
・説明文の大意をおおまかにつかみ、簡単な内容を発表できる。

5　指導内容の概要（※詳細は【別紙】参照）
・挿絵と文を対応させながら、教師の範読を聞く。
・挿絵を見たり、教師と対話したり、簡単な内容を発表させる。
・わからない言葉の意味や漢字の読みを確認しながら、音読させる。

6　指導における工夫点・学習の成果
・理解の難しい言葉は、母語や動作化等で説明することにより、内容の理解が深まった。
・日本語で話したり、母語で内容を伝えたりして自由に発表する時間を設定することで、学習に興味を持って取り組むことができた。
・形式段落ごとに丁寧に読む練習をすることにより、単語のまとまりで音読できるようになってきた。
・先行学習をすることにより、在籍学級では、自信を持って学習に取り組めることが増えてきた。

7　教材・教具（開発教材も含む）
・小学校国語３年下「ありの行列」（光村図書）
・五味太郎の「漢字の絵本ⅠⅡ」

8　活動の様子（板書や児童生徒の写真等）



・『ありの行列』の音読をしたあと、「○○が、△△しています。」等、挿絵を見ながら主語と述語を見つけ出し、ホワイトボードに書いている。
・この学習を取り入れたことで、『ありの行列』の中に出てくる「ありが、△△をしています。」という読みとりがスムーズにできた。
・指導者も「ありは、何をしていますか。」と同じパターンで話しながら、話の内容理解にもつなげる。

【別紙】指導の流れ

学　習　活　動	指導上の留意点
1 あいさつをする。 ・学習の流れを確認する。	・今日のめあてや学習する内容を黒板に貼ることで見通しを持たせ、意欲的に課題に取り組めるように学ばせる。
2 挿絵からイメージしたことを話す。 ・登場人物について ・何をしているか	・挿絵からありが出てきて、何かをしている様子など、やり取りをしながら自由に話をさせる。自分なりにイメージすることで物語を読み進めることがより楽しくなるようにする。
3 だれが（は）、何をしたかを考える。	・動物が乗っている挿絵を準備し、それぞれの動物が何をしているかを見つけて、ホワイトボードに書く。 ・「○○が（は）、△△しました。△△しています。」など意識して見つけることで、「ありの行列」の中で、ありが、どんなことをしたかを見つける手がかりとなるようにする。
4 音読をする。	・ゆっくりとことばのまとまりで読めるように、スラッシュを入れる。
5 ありがしたことを見つける。	・「ありが（は）、何をしましたか。」と問い、「ありが（は）、△△しました。」と見つけさせる。 ・ありがしたことを見つけられたら、ありがしたことの順番を確認する。
6 ふりかえりをする。	・今日、帰って何をするかを話す。 「ぼくは、勉強します。」 「ぼくは、ゲームをします。」 「ぼくは、お風呂に入ります。」など

1　児童生徒の日本語習得状況

(1)　ＤＬＡステージ（令和４年５月２４日）

ステージ２

(2)　ＤＬＡ＜話す＞のステージ（令和５年１月３０日）

日本語能力	ステージ３
母語力	ステージ３

2　児童・生徒の実態

(1)　学　　年：　【生徒①】中学校・第１学年
　　【生徒②】中学校・第３学年

(2)　国籍・母語：　シリア・アラビア語

(3)　在 留 期 間：　５０ヶ月

(4)　日本語習得状況及び学習状況

【生徒①】

・生活言語はできるが、学習言語は理解が難しい。
・ひらがなやカタカナの読み書きができる。しかし、漢字は読めない。
・音読は漢字をとばしながら読む。
・黒板の字を見てゆっくり写すことができる。

【生徒②】

・あいさつ程度の会話はできるが、生活言語、学習言語ともに理解は難しい。
・ひらがなの読み書きが少しできる。
・音読は一字一字指でたどりながら読む。
・黒板の字を見てゆっくり写すことができる。

3　教科：単元名　（日本語指導：教材名）
日本語指導：漢字一覧表

4　本単元（本教材）の学習から伝えたい学力及び日本語学習能力

・小学校低学年で習う漢字を読む努力ができる。
・漢字の言葉の意味を理解し、それらを使って文章を作ることができる。

5　指導内容の概要

・漢字の読みを復唱させる。
・言葉の意味を確認し、さらにくり返し読みを唱えさせる。
・覚えた言葉を使って文章をつくり、話したり書いたりさせる。

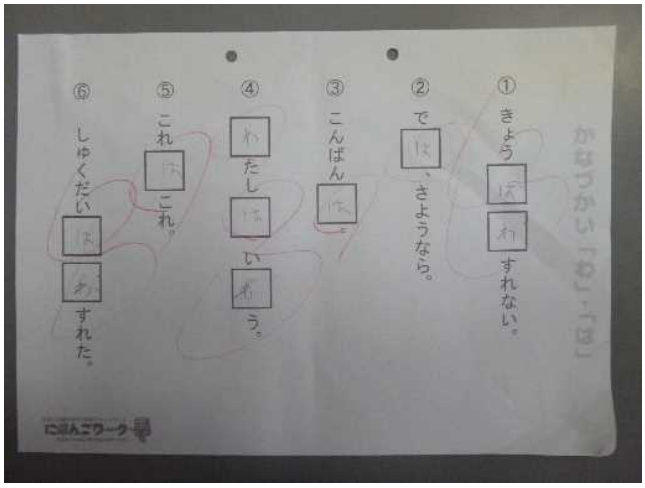
6　指導における工夫点・学習の成果

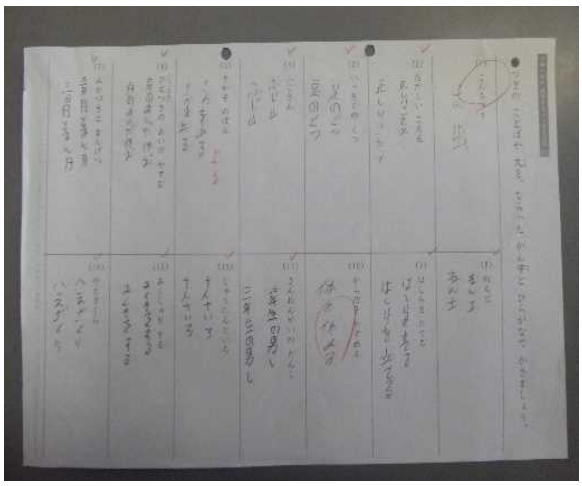
・生徒の日本語習得状況に合わせて口頭作文、作文など課題を使い分けた。
・似ているけれど異なる漢字などは注目するポイントを伝えた。
・読んで意味を確認し、それを活用することで定着度が向上するようにした。

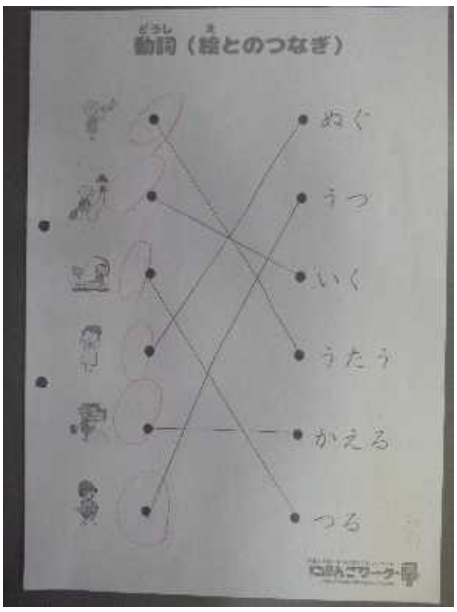
7　教材・教具（開発教材も含む）

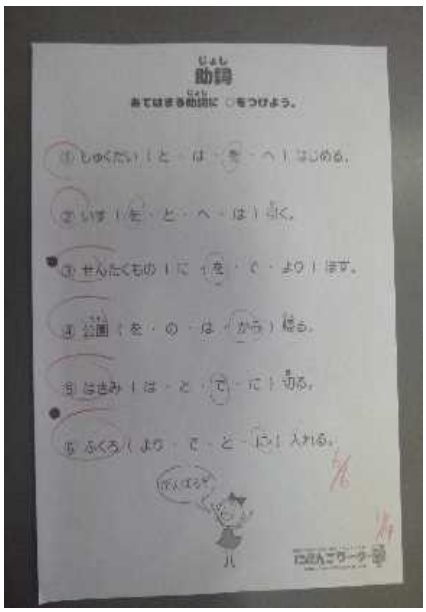
・漢字一覧表

８　活動の様子（板書や児童生徒の写真等）









日本語指導支援推進校事業　実践報告書【中学校・日本語】　P.4へ戻る

1　児童生徒の日本語習得状況

(1)　ＤＬＡステージ（令和４年５月 11 日）

ステージ５

(2)　ＤＬＡ＜話す＞のステージ（令和４年 10 月５日）

日本語能力	ステージ５
母語力	ステージ６

2　児童・生徒の実態

(1)　学　　年：　中学校・第３学年
(2)　国籍・母語：　フィリピン・フィリピノ語（英語）
(3)　在 留 期 間：　131 ヶ月
(4)　日本語習得状況及び学習状況

家庭での会話は英語もしくはフィリピノ語で、日本語環境は学校のみである。日本語習得に停滞が見られ、得意教科の英語で和訳に問題が生じ出した。

和訳と同様に日本語表現としての作文が苦手で、克服させたい課題である。数学についても、文章題の読み取りに起因し、苦手教科として伸び悩んでいる。

3　教科：単元名　（日本語指導：教材名）

日本語指導：「人間はどれだけの力を出すことができるか？」「文明の逆説」

4　本単元（本教材）の学習から伝えたい学力及び日本語学習能力

・初見の文章を読んで、「５ＷＩＨ」に留意して文意を正確に読み取る。
・主述の関係等、文の成分を正確に把握する。
・指示語の指す内容を正しく読み取る。
※短い読後感想や意見を書くことで作文の苦手意識の克服を図る。

5　指導内容の概要（※詳細は【別紙】参照）

・指示語や接続語に注意して段落ごとに内容を理解し、読後の意見や感想を書く。

6　指導における工夫点･学習の成果

・指示語の指す内容を正しく読み取らせる。
・接続語による段落や文のつながり方を読み取らせる。
・短い意見や感想を書かせることで作文への抵抗を軽減する。

7　教材・教具（開発教材も含む）

・「文明の逆説」〔立花隆 著〕Ⅲ章「人間とは何か」五十問から抜粋。

8　活動の様子（板書や児童生徒の写真等）

・教科書以外の文章を、支援を受けながらも読んで知ることの面白さを感じたようである。

【別紙】

本時の目標・論説文「問 12/人間はどれだけの力を出すことができるか？」を読み、文章の仕組みを理解するとともに、指示語、接続語に留意し内容理解を深める。

・理解した内容をもとに意見や感想を短文で書く。

本時の展開

学習活動	指導の留意点
① 文章全体を〔音読で〕通読する。	・２年時は自ら国語の授業の入り込み指導を希望し、日本言理解に不安を持っているので、教科書以外の文章を学年年齢レベルで理解できる内容のものを選択し、日本語力に自信が持てるように読みの支援をしたい。 ・読み方が分からない難語句の意味については、前後のつながりから推測させ、できれば国語辞典で確認させる。（※辞書を引くことで自学自習の力をつけたい。）
② 指示語が指す内容を読み取る。	・指示語の指す内容にあたる箇所に線を引かせ、「これ・それ」が、であれば「何」がか、また「そう」なら「どう」なのか、指示語に置き換えてみる。 ・単語ではなく文単位であればキーワードを捉え、日本語として不自然でないように推敲し、できるだけ短くまとめる。
③読後初発感想を述べる。	・文章の難易を確認するのも一考。
④「題」ついての答えになる形式段落を探す。	・形式段落の知識はあると思われる。
⑤ この文章を２つに分けるとどこから２つ目になるかを考える。	・形式段落の内容の関連から大きく２つに分ける。 ※「人間の力というものは」という言い方からまとめ（結論）の段落になることに気づかせたい。「つまり」という語の使い方にも留意させたい。
⑥ 前半部をさらに分ける。（３つの意味段落に分ける。）	・前半部は①序論、②本論と後半部の③結論の３つの意味段落に部分の構成の文章であることを理解する。 ・文章全体の大意だけでなく、形式段落の内容を丁寧に読み取ることで、話題の関連性から意味段落にまとめる。「指示語」や「接続語」が手がかりになることに気づかせたい。
⑦ 読後の感想や意見を書く。	・部分の意味を的確に読み取ることで読みを深め、意見や感想を持ちやすくする。

※時には「視写」も、一字一句注意しながら写すことで、助詞の意味指示語、接続語の読み取りに資すると考えられる。

P.4へ戻る

1　児童生徒の日本語習得状況

ＤＬＡステージ（令和４年５月 10 日）

日本語能力	ステージ４

2　児童・生徒の実態

(1)　学　　年：　小学校・第５学年

(2)　国籍・母語：　ベトナム・ベトナム語

(3)　在 留 期 間：　81 ヶ月

(4)　日本語習得状況及び学習状況

日常会話はよくできるが、話すときには指示語を使うことが多く、具体的に分かりやすく説明することは難しい。根気よく反復しながら積み上げていくことが苦手であり、学年相応の言葉や文章を正確に扱っていく力は十分でない。

3　教科：単元名　（日本語指導：教材名）

国語：あなたは、どう考える

4　本単元（本教材）の学習から伝えたい学力及び日本語学習能力

本文に習い、自分の考えを整理して書く。

5　指導内容の概要（※詳細は【別紙】参照）

本文「安全のために、よび出しは番号がよい」に習い、在籍学級で提示されたテーマ「スーパーマーケットは２４時間営業がよい（でないほうがよい）」について、自分の考えを整理して書く。

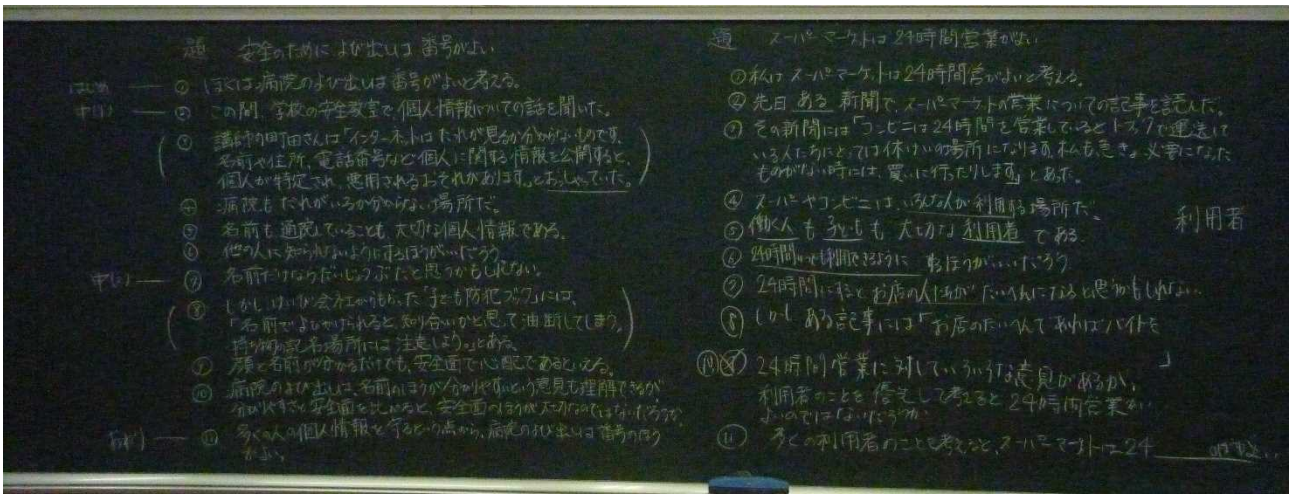
6　指導における工夫点･学習の成果

本文に習って書く場合の支援として、各文章に通し番号を付け、それぞれの文章を自分なりに書き換えていくことにした。通し番号を付けることで、各活動に見通しが立ち、その時々に何を考えればよいかを明確にできた。児童が思いつかない時には、教師が言葉をいくつか例示することで、言葉をつないでいこうとする意欲を維持して学習を進めることができた。

7　教材・教具（開発教材も含む）

国語　五　銀河（光村図書）

８　活動の様子（板書や児童生徒の写真等）
　　通し番号を付けた文章とそれに対する児童の文章を対比して板書した。



【別紙】指導の流れ

本時のねらい　例文をもとに意見文を書く。

学習活動	支援と留意点
１　意見文のテーマについて自分の意見を持つ。 「スーパーマーケットは、２４時間営業がよいか、２４時間でないほうがよいか」	○理由となる出来事や思っていることを発表させ、説明に困っている場合は支援し、言葉を補っていく。
２　意見文の書き方について見通しを持つ。 (1)　例文に通し番号がついている理由を知る。 (2)　番号ごとに文章を考え、つないでいくことを知る。	○板書された例文に通し番号がついていることを知らせ、考える文章の数をはっきりさせ、ゴールを意識させる。 ○例文の文章の型を使っていくことを知らせ、書こうとする文章に合う言葉を使えばよいことを知らせる。 ○思いつかないときは、教師が言葉の選択肢を用意することを伝えておく。 ○通し番号１番から順に書いていくが、難しい場合は、考えやすい文から考えさせる。
３　通し番号の順に意見文を書く。	○文章になりにくい時は、教師が言葉の選択肢を用意し、選ばせる。

４　ＪＳＬ参照枠（全体）とＤＬＡ（４技能）の評価例

文部科学省「外国人児童生徒のためのＪＳＬ対話型アセスメントＤＬＡ」より

ステージ	学齢期の子どもの在籍学級参加との関係	DLA＜話す＞						DLA≪読む＞					DLA＜書く＞						DLA＜聴く＞			支援の段階	日本語の学習段階
		話の内容とまとまり	文・段落の質＊	文法的正確度	語彙＊	発音・流暢度＊	話す態度	読解力	読書行動	音読行動＊	語彙・漢字＊	読書習慣・興味・態度	内容	構成＊	文の質・正確度	語彙・漢字力	書字力・表記ルール＊	書く態度	聴解力＊	聴解行動	語彙・表現		
6	教科内容と関連したトピックについて理解し、積極的に授業に参加できる	□まとまった話が１人でできる □年齢相応の教科学習語彙が使える □発音が自然で、流暢度が大変高い						□文や意味のまとまりに区切りながら、流暢に読める □年齢枠相応の語彙や漢字がよく理解できる					□まとまりのある作文が書ける □効果的な段落が作れる □表記上、正確度の高い文章が書ける						□教師の話の内容の大筋と流れがよく理解できる			支援付き自律学習段階	教科につながる学習段階
5	教科内容と関連したトピックについて理解し、授業にある程度の支援を得て参加できる	□ある程度まとまった話ができる □教科学習語彙がある程度使える □発音が自然で、流暢度が高い						□ややゆっくりではあるが、だいたい文や意味のまとまりに区切って読める □年齢枠相応の語彙や漢字がある程度理解できる					□ある程度まとまりのある作文が書ける □段落が作れる □表記上、誤用が少ない文章が書ける						□教師の話の内容の大筋と流れがある程度理解できる				
4	日常的なトピックについて理解し、学級活動にある程度参加できる	□文を生成し、ある程度連文ができる □日常語彙が使える □発音が自然で、流暢度がある						□安定して文節や単語に区切って読める □1つ下の年齢枠の語彙や漢字が理解できる					□文と文をつなげて、流れのある作文が書ける □表記上の誤用はあるが、意味は通じる文が書ける						□身近な内容の話を聴いて大体理解できる			個別学習支援段階	
3	支援を得て、日常的なトピックについて理解し、学級活動にも部分的にある程度参加できる	□単文レベルの応答ができる □身近な日常語彙が使える □流暢度が低い						□ゆっくりではあるがだいたい文節や単語に区切って読める □支援を得て、2つ（または3つ）下の年齢枠の語彙や漢字がある程度理解できる					□テーマと関連がある複数の文が書ける □文字・表記上の誤用が多い						□ごく短い身近な内容の話を聴いて支援を得てある程度理解できる				初期の後期段階
2	支援を得て、学校生活に必要な日本語の習得が進む	□二語文 □基礎語彙が使える □流暢さなし						□文字習得が進む □身の回りの語彙を聞く、または、読んで、理解できる					□文を書こうとする □表記ルールをある程度理解して文を書こうとする						評価対象外			初期支援段階	（一年以内）
1	学校生活に必要な日本語の習得が始まる。	□一語文 □わずかな基礎語彙が使える □流暢さ無し						□文字習得が始まる □身の回りのよく知っている語彙を聞く、または、読んで、理解できる					□いくつかの関連する単語を並べることができる □表記ルールについての理解が始まる										初期の前期段階	（6か月以内）